

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：205部
つつじが丘：430部

【全戸配布】
国津地区：380部
滝之原地区：125部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：30部

有害駆除＝絶滅の危惧 すみ分け・共存を考える

昔から、個体数の減少が農林被害減少に繋がるという単純な発想を前提に、増えすぎたら駆除し、減りすぎたら保護し、増えたらまた……といった、行き当たりばつたりの計画性のない対策をとりつづけて来ましたが、今後は、野生動物たちと人間が適切な距離を保ちながら、共存を目的とした取り組みを進めていかなくてはいけない時期にさしかかっています。

野生鳥獣による農作物被害は年々深刻になっており、私たちの生活を脅かす上で対策は、欠かせないことといえます。しかし、こうし

た対策が十分に行われたとしても、野生鳥獣との軋轢がなくなるわけではなく、野生鳥獣が生存する限り、鳥獣の被害は永遠に続きます。

私たちは被害対策だけではなく、これから先は、野生鳥獣との付き合い方を考える時期にさしかかっています。

◆ 軋轢の原因

野生鳥獣と人間との関係について、その長い歴史を振り返ってみると、人間は野生動物を含めた自然資源に依存して生活してきた経緯があります。

それが、ここ数十年という短い期間に、自然界を人間が征服するという関係の変化が起きました。依存型から征服型への転換で、人間がその活動の中で野生鳥獣の生活圏を略奪してしまつたのです。

この図式が、野生鳥獣と人間との間に軋轢を生む、大きな要因となっています。

◆ 個体数増加 駆除数増加

また、日本在来のシカやイノシシが近年、急速に生息数が増加し、全国で分布を広げ生態系や農林業、さらには私たちの生活にまで深刻な被害をもたらしています。

シカは寿命が長く、1歳以降の殆どのメスが毎年1頭の子を産む、繁殖力の高い動物とされています。

イノシシも繁殖力が高く、ほぼすべてのメスが毎年4〜5頭の子を産みます。また、両者とも温暖化の影響が個体数増加に繋がっています。近年、野生鳥

獣被害の対策が高まり、野生鳥獣有害駆除（以下、有害駆除と表記）

生動物は、農作物の味を覚えた特定の個体に限られています。しかし、駆除されているなかには、里に出没せず被害を引き起こしていない奥山の個体も多くいます。

有害駆除には加害個体の特定が最も重要なことで、被害現場に捕獲檻を設置するなど、加害獣を特定して捕獲することが重要です。

現在行われている有害駆除は、生息数を減らすことばかりに眼を向け、獲りやすい個体を狙うハンターが多く、有害駆除が、野生動物の地域的な絶滅に繋がっているのではないかと危惧しています。

有害駆除の真意は自然環境との調和を守るための行為で、闇雲に動物を駆除していいというわけではないということ認識する必要があります。

被害現場である集落では、有害駆除に頼ってしまつていくと、追いついていくことが多くなつていくので、追いついていくための努力を徹底的に行い、やむを得ない場合に限り駆除するということが求められます。

鳥獣被害対策は、個体群管理、侵入防止対策、生息環境管理の3本柱が鉄則です。

人家の近くに出没した場合、人の生活の安全を確保するために駆除せざるを得ません。

有害駆除の発想は、野生動物を減らしたから被害が減るという前提に成り立っています。しかし、被害の方は一向に減少の気配は見えてきません。

縄文時代、狩猟は生活するための重要な手段であり、矢はとも大切な狩りの道具でした。縄文時代のほとんどの遺跡から黒曜石やチャートといった石で作った石鏃（やじり）が発見されています。農耕が始まる縄文後期では、狩猟は現代の有害駆除の色合い濃くなつてきます。



しかし、その昔、生息地が確保され、生息距離が適正に保たれていた時代には、このような問題はなかったのです。野生動物たちにとつて豊かで快適な環境が非常に少なくなつてい

ます。現在、殆どの自然環境には人間の手が入っており、野生動物は人間活動の影響を受けた環境の中の生活を余儀なくされています。

人間の都合だけで一方的に野生動物の数を減らすと、生態系が乱れて、生物の多様性がなくなるなど、あまり良い結果に繋がらないのは…。

◆ 共存を考える 「すみ分け」Ⅱ『生活様式のほぼ等しい異なる種の生物群が、生活空間や生活時間・時期を分け、競争を回避しながら共存する現象』。

現在起こっている野生鳥獣による被害の増加は、人間と野生鳥獣との間の距離感が崩れたことが原因です。

このことから、近づき過ぎた生活領域を適正に保つ「すみ分け」を図る必要があります。しかし、「すみ分け」という発想は、それぞれの種と私たちの間に線引きをすることに

人間として当然のことです。野生動物の存在を尊重し、野生動物たちの立場に立って考えてみることで、適切な案や発想などが浮かんでくると思います。

シカもイノシシ、サルも、私たち人間も、森のいち住人であり、生態系の重要な構成員であるということをお忘れなさい。

野生動物は、基本的に怖がり、人を避けて生活していましたが、近年では市街地周辺にまでも出没するようになりましたが、これは人間の都合で経済を優先した環境破壊が大きく関わっています。

今回、提唱する野生動物との共存は、かなり困難。しかし、日本は湿潤な気候に恵まれ、豊かな森が広がり、世界の先進国の中では唯一、大型の野生動物が人のそばで暮らしている国で、野生動物との共存は可能性がないわけではないと思います。

有害駆除は人間側に立つことが基本ですが、有害駆除など種の減少に繋がる行為は、可能なかぎり控える姿勢が重要だと考えます。

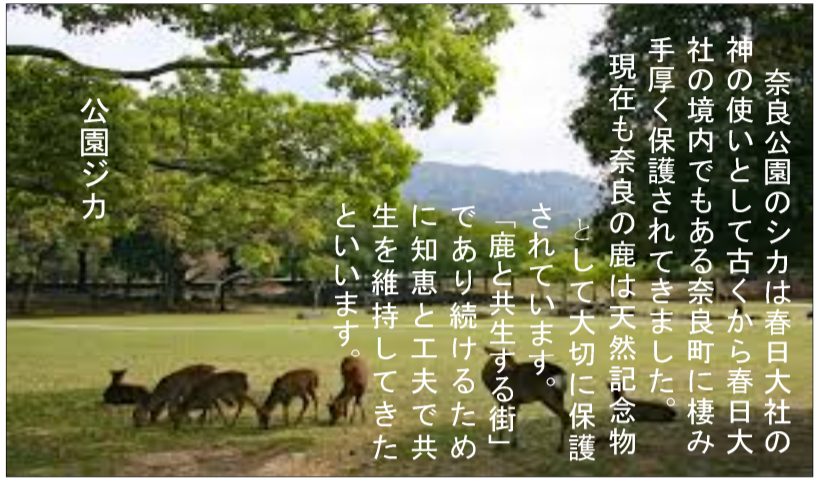
野生動物が減少することにより、生態系に深刻な影響を与へ生態系の破壊が進み、大規模な環境破壊に繋がるということが重要です。

奈良公園のシカは春日大社の神の使いとして古くから春日大社の境内でもある奈良町に棲み手厚く保護されてきました。現在も奈良の鹿は天然記念物として大切に保護されています。

奈良公園のシカは、食性の内容により、奈良公園の平坦地に生活する「公園シカ」と「若草山のシカ」の2タイプに分けられますが、両タイプ共、芝を最も重要なエサとしています。このように芝に強く依存する点で、他地域の野生の日本シカと大きく異なります。



若草山シカ



公園シカ

鳥害対策

鳥類による農作物被害は、平成13年をピークに減少傾向にありましたが、ここ数年は35億円前後で推移。鳥類による農作物被害は、空から飛来しては農作物を荒らし、空に戻るという特異性があり、捕獲することも監視することも難しいのが実情です。

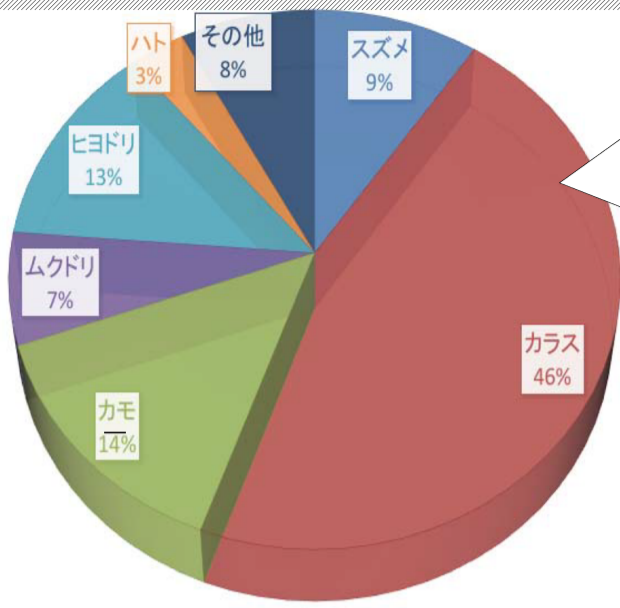
◆加害鳥種と被害額の割合

左図は加害鳥種と被害金額の割合グラフです。

◇鳥類の被害の約半分は、カラス（ハシブトガラス、ハシボソガラス）による。

◇鳥類全体被害
被害面積：6,900ヘクタール
被害量：28,800トン
被害金額：32億円

左図：平成29年度加害鳥種と被害金額割合。



◆鳥の性質

◇鳥の視覚

人間と同程度か、やや優れている。
▽見える色
人間は3原色だが、鳥は4原色。（鳥は多くの紫外線が見える）
▽視力
人間と大して変わらない。

◇鳥の聴覚

鳥の聴覚は人間よりやや劣る。
◇味覚と臭覚
味覚を感じる細胞の数は、ニワトリやカモ、カラスでは数百個で、人間の約一万个よりはるかに少ない。但し、糖度の高い果実を好んで食べるなど、味覚を感じることは出来る。

◇鳥の学習能力

鳥害防除が難しい理由の一つは、学習能力の高さ。
昆虫では、特定の色の光やフェロモン剤の

ような、本能的な刺激による防除剤があるが、鳥の場合状況判断と記憶力で、追い払い装置に危険がないことを数日で学習してしまう。鳥が本能的に避け続ける色や音はない。

◇追いつきの道具類

視覚系では、防鳥テープ、吹き流し、CDやマネキン、かかし、鳥の死体などがある。また、様々なグッズが市販されているが、どのようなものでも慣れが生じる。目玉模様や磁石はそれ自体に特別な忌避効果はなく、田の追い払い道具と同様に、見慣れないものへの警戒心である。カラスの場合、他の鳥以上にこの

爆音系

農地と民家が混在している日本では騒音問題である。単調な爆音の繰り返しには、すぐ慣れてしまう。
鳥が捕まった時に出す悲鳴のことで、遭難声ともいう。市販の防鳥機器によく使われている。ねぐらからの追い払いには有効だが、農地ではすぐに慣れてしまうことが多い。

物理的侵入防止

色んなグッズが市販されているが、なるべく簡易なものを設置することが重要である。また、費用効果を考えて、効果のあるものを設置することが重要である。（参考：農研機構HP）

れらの見慣れないものを警戒することがあり、費用効果を吟味して使えば有用な場合もあるが、但し、いずれ慣れてしまうことには変わりない。逃げたスズメもすぐ畑に戻ってきたなど、ドローンによる逃避は一時的なもの、その場所を忌避するほどの脅威をスズメに与えることは出来なかった。

ドローンによる対策は不可能

ドローンが飛んだが、一部のスズメは畑から出なかった。逃げたスズメもすぐ畑に戻ってきたなど、ドローンによる逃避は一時的なもの、その場所を忌避するほどの脅威をスズメに与えることは出来なかった。

鳥の学習能力

鳥害防除が難しい理由の一つは、学習能力の高さ。
昆虫では、特定の色の光やフェロモン剤の

鳥の学習能力

鳥害防除が難しい理由の一つは、学習能力の高さ。
昆虫では、特定の色の光やフェロモン剤の

鳥の学習能力

鳥害防除が難しい理由の一つは、学習能力の高さ。
昆虫では、特定の色の光やフェロモン剤の

は大きな効果はないようです。サルの天敵がいらない以上、人間がしっかりとした対策を講じることが重要になります。

その② 「クマタカ」シカを襲う！

インターネットで、次のようなショッキングな記事を目にしました。

クマタカHPより
『1984年5月17日、クマタカの若鳥がシカを襲った。植林地にいるニホンジカの後方から接近し、浅い角度で首筋をねらい急降下した。ニホンジカは植林地の下方に左右に飛びはねながら逃走し、若鳥は3回攻撃したがすべて直前でかわされた。ニホンジカの性別は不明であるが大型の成獣で、若鳥との体重差は20倍以上はあったものと思われる。親鳥からの給餌が行なわれなくなる時期のため若鳥は相当空腹であったことが予想され、それがこのようなハンティングを行なわせたものと考えられる。環境省の猛禽類保護センターが山形県で行った調査結果にもクマタカがニホンジカを餌として巣に持ち帰ったデータがあり、シカを時折捕食しているようだという。』※クマタカは日本では、北海道から九州の山地の森林地帯に、留鳥として広く分布している。

その① サルの天敵

サルの天敵は、ヘビだといわれていますが、これについては色々な意見があります。
サルの脳内には、ヘビを見つくと恐怖や警戒をする器官が発達していて、サルはヘビを見ると恐怖や警戒心に駆られるのだといわれています。
しかしながら、ヘビがサルを捕獲して食べるのかと言うことになると疑問が残ります。
明治時代までは、オオカミが野生動物の天敵として君臨していたのですが絶滅してしまいました。また、犬猿のなかの野犬も激減し絶滅状態です。
したがって、サルにとっての天敵は人間ということになるのではないのでしょうか？。しかし、人間社会では高齢化の波が押し寄せ、年寄りばかりで、猿を追い払いが出来るような若者は少なく、サルはやりたい放題です。近年、サルによる農作物被害が非常に大きくなっています。サルは芋やミカンをはじめ、色々な農作物を食害するとても厄介な動物です。ヘビの玩具が効果があるという話もありますが、実際に

サル出没状況

冬から早春にかけて、山の中の餌が乏しくなるため、サルは冬場は他の季節より大胆に農地や集落に出没します。（冬や真夏は農地への出没が増える）
日当たりがよく暖かい場所を好み、餌が簡単に入手できるような場所を中心に生活するようになります。

に放置した野菜くずや廃果をサルが狙います。また、集落内に多数存在する収穫しないミカンやユズなどもサルの餌になります。
これらサルを誘引するものを無くすことがサル対策の基本です。サル対策は根気よく第一です。多少効果が低くても、だれもができる方法を選ぶことが重要です。

名張A・B群とも大きな変化はありません。A群は先月同様、青蓮寺湖と比奈知湖周辺に出没が集中。
B群は、長い間、西谷や竜口周辺を動かなかったのですが、令和2年末頃から、近鉄の線路を越え、三本松周辺を主に遊動するようになっていいます。
集落の中に、サルが簡単にかつ安心して食物が得られるような環境があれば、そこを利用する頻度が高くなります。
サルは、恐怖体験には敏感に反応することから、西谷や竜口周辺で防護対策の強化なども嫌な出来事があったのかも知れません。

